

道新に掲載された旭川高専関係者の活躍情報 2002/02/17 2002/05/16 改

おことわり

著作権の関係で見出しの紹介程度の内容になっていることを予めお断りしておきます。又、当ページでの掲載順は不定です。

NEW 北海道カナディアンカヌークラブ代表 * 天塩川下る旅 * 地球の大きさ実感して 酒向勤さん

北海道新聞夕刊全道 掲載日 :2002/04/20 ページ :2

1957年、上川管内和寒町生まれ。旭川高専を中退した「さこう・つとむ」さんの記事から抜粋
20歳からカヌーを始め、はまなす国体の道代表としてスラローム競技で5位入賞。88年に北海道カナディアンカヌークラブを設立。有限会社酒向自動車工業専務。

日本最長の百五十七キロの川の路(みち)。これを三泊四日かけてこぎ下る国内初のカヌーツーリング大会「ダウン・ザ・テッシ - オ - ペツ・スペシャル」が、七月二十日から二十四日に上川管内風連町 - 留萌管内天塩町間の天塩川で開かれる。風連を出発して、名寄、美深、音威子府、中川、幌延、天塩の七市町村を通過。天塩川は源流から河口まで移動すると緯度で北緯四四度から四五度まで動いたことになり、地球の大きさを実感できる。実際に川を下ると「ここは日本かな」と思うような景観が広がり、スケールが大きい。こんなロングツーリングができる川は天塩だけなんです」

家具の街・旭川の木材産業の草創期から現代までの歩みをまとめられた 木村光夫名誉教授

北海道新聞朝刊地方 掲載日 :2000/01/26 ページ :23

旭川家具工業協同組合(長原実理事長)が創立五十周年記念事業として九九年に刊行した「旭川木材産業工芸発達史」をまとめられました。

新聞で取り上げられた紹介記事の一部を引用します。

明治期の上川地方の開発から木材産業の誕生とその発達、旭川家具の全国進出、九〇年から三年に一度開催しているIFDA(国際家具デザインフェア旭川)など、旭川の木材産業・工芸の歴史を日本と世界の動きを視野に入れながら、北海道の代表的な地場産業である木材・家具産業の歴史を詳細に紹介している。」

金属工芸作家として活躍中 中津川仁さん(38)

北海道新聞夕刊地方 掲載日 :2002/01/17 ページ :11

タイトル:< ギャラリー > Gallery26thオープニング展 = アトリエ「クラシカルサインボード山猫」
卒業後、名古屋の企業などに勤務。一九九六年に旭川に戻り、アトリエ「サインボード山猫」(旭川市春光町2区1)を開設した。
動物をかたどったドアプレートやオブジェのほか、札幌市近郊の新進工芸作家の作品を展示している。

ミス旭川に選ばれた在校生 松本美姫子さん(18)

北海道新聞朝刊地方 掲載日 :2001/07/31 ページ :26

2001/7/19に新しく選ばれたミス旭川の在校生がマナーの基本を学びながら「旭川を全国にPRしたい」と頑張っています

鋳物の箱のスピーカーを開発 臼井憲之さん(40)(臼井鋳鉄工業社長 本社 旭川)

北海道新聞朝刊地方 掲載日 :2001/12/01 ページ :23

福島県郡山市のベンチャー企業と共同開発した「CASTRON(キャストロン)」が、金属は継ぎ目がないため「箱鳴り」といわれる共鳴音がなく高品質な音が評価されている。
道新「< 道北新世紀 挑む > 第5部 元気出せ! 経済 * アイデア生かし活路 *」で東京・秋葉原の大手オーディオ専門店で購入されていると紹介されています。

2001同窓会報でも9ページの右上に製品の写真を掲載しています。

歌人として活躍 岡しのぶさん (20)

北海道新聞朝刊 掲載日 :1997/01/01 ページ :1

岡さんは一度会報でも紹介されたように思います。

今回は「< 97新年号 第3部 20歳 歌人岡しのぶの世界 > 心 * いま大地に生きる」の欄に記事が載りました。

17歳から新聞、週刊に短歌を投稿し、94年に『短歌現代』新人賞佳作を受賞。

1996年には、第1歌集『もし君結ばれなければ 飛びたてぬ十九歳の歌集』を出版して活躍中です。

1997/03/31の夕刊では、STV『岡しのぶの明日への伝言板』(金、後11・30)は、旭川高専卒の歌人岡がパーソナリティーを務めるトーク番組であると載っています。

金属から木を扱う仕事へ転身した 八重樫範明さん (30)

北海道新聞朝刊 掲載日 :1998/05/10 ページ :14

タイトル:< 北の魅力 Uターン物語 > 下川 森林組合職員 八重樫範明さん、看護婦 佳子さん * 森と木の香に囲まれて

旭川高専卒業後、豊橋技術科学大を得て念願の研究部門に配属されたが、長野五輪のスケート会場にもなった世界初の木造つり屋根構造『エムウエーブ』に感動。

『木であれだけの建物ができるなんて』と素材としての木の可能性に惹かれての転職だそうです。

市民グループ『まちこみ・みちくさ』代表を務める 白井暢明 (のりあき) 教授

北海道新聞朝刊地方 掲載日 :2002/01/01 ページ :1

タイトル: < 新年号 第6部 道北特集 > 白井暢明 * 楽園創造 * 新時代を開く(ゆとりの空間 * 『効率優先』を超えて

一部を引用して紹介します

阪神淡路大震災とニューヨーク同時多発テロを例にとって

「『効率』は『密集』を育て、密集は大災害を生む」。

『こうした効率とモノ優先の文明の時代はもはや終末に類(ひん)している』。

二十一世紀の楽園、北海道が築くべきものは、IT、バイオ、環境(リサイクル、省エネ)、食糧、観光などのソフト産業を基幹産業とし、そして自然、芸術、コミュニティー(豊かさの三点セット)に支えられた新時代の『ライフスタイル』である。

こうして、この『日本離れた』空間と風景、二十一世紀型ライフスタイルはやがて、外からの訪問者を魅了し、黙っていてもヒトと金がこの北の大地に降ってくるにちがいない。

これぞまさに『フロンティア』、『楽園』創造物語の始まりである。」

興味のある人は『高専サイト』のホームページ『まちこみ・みちくさ』もご覧下さい

遊び心で作った自家発風力発電機 飛弾野哲宏教授

北海道新聞朝刊地方 掲載日 :1998/12/02 ページ :22

タイトル:< あさひかわ新百景 身近な不思議 > 6 * 風力発電機

父、飛弾野数右衛門さんと30年間に10機を作られたそうですが、今は使われていないとのこと。

東川町上空約一〇メートルにプロペラを回した模型飛行機のようなものがあるそうです。

稚内で『木馬館』を営む 中村正人さん

北海道新聞夕刊 掲載日 :1997/01/31 ページ :2

旭川で開催された同窓会で講演して頂いたのでご記憶にある方も居られると思います。

「<北海道ひと紀行>第23部 海峡の街から・稚内」で「最北の街に生まれ、住んで、それぞれの選んだ道を歩む三人」の一人として紹介されました。
以下、一部を引用させていただきます

知的障害者の通所授産施設「稚内木馬館」では、今日も最新の電動工具がうなり、さまざまな木工製品が生まれる。

施設であることに甘えては駄目。商品が認められなければ、働き、遊び、住む。障害者が当たり前の暮らしをするには、収入の保証が基本」

施設長の中村正人（49）の信念だ。

十五年間、稚内養護学校で教員を務め、卒業しても行き場のない子供たちの将来に心を痛めてきた。

全校挙げての努力と父母、市民の協力で八六年、学校の近くに卒業生が通える共同作業所を開設。九二年から専任の施設長。

「木工をやろう」。中村は最初に決めていた。「金にならない仕事を、障害者に平気でやらせることはできなかった。木工なら、オリジナリティーがあれば商売になる」

機械を入れ、図面を書く。高専で学んだ機械工学の知識が生きた。家具、遊具、生活雑貨。木馬館製品の評価は高まり、売り上げは十年で二十倍に。「でも、通所者に払える月給は、まだ二、三万円。もっと努力しなくては」施設の喫茶コーナーで、通所者が入れたコーヒーを飲んだ。うまい。「そうでしょう、お金をいただく以上、ほかの店に負けないコーヒーを出さなくちゃ」。中村の顔がほころんだ。